語句の部分につき、先方の身分に應じて上・中・下輩にそれぞれ適合すべき恭敬謙遜の語法を示すべし。

十七、飜譯法を敎ふる際、原文・直譯・意譯の三者若しくは二者を對照して示すこと。二者對照の場合には、原文と意譯と、若しくは直譯と意譯との組合せとなるべし。原文と直譯との對示は要なし。

十八、書翰句例中、轉讀體と讀み下し體との對照

適當なる送假名の施さるべきことを示すに利あり。漢文飜譯對照に前後して示すを可とす。

右の外、是と非と、巧と拙と、凡そ對示して了解を助くべきものは猶多かるべし。

第五節　句例文例の示し方

粗讀一回、雲烟の眼を過ぐるが如くにして已まば、句例文例の効力はいづれの處にか求めん。故に他人の奬勵を待たず、愛玩熟讀するに至らしめんことを望まざるべからず。能くここに至らしめんには、平素の敎授宜しきを得て文の趣味を咀嚼する能力の完全に啓發せられ、之に供するに例の適切なるものを以てするにあるのみ。故に例は、その過巧ならんよりも、寧ろ生徒の能力に適するものを擇べ。その思想の內容老成に過ぎて、生徒の現境之に及ばざらんよりも、寧ろ、日日彼等の四周を圍み、その心情を動かすに足るものを擇べ。學力の進むに從ひて、構想に、辭樣に、漸次巧妙なるものを示すべきは論なけれども、解しがたく味ひ難きものを提供すべからず。此等の理由の下に、作文の模範例は、讀本の文に比して自ら幾分の差異あるべきなり。中等敎育程度にありては、講讀としては漢文もあるべく稍、古風なる國文も含まるべしと雖も、作文の模範としては此等のものを要せず、只今文體の最も健全なるものを採るべきなり。何をか健全の文といふ。思想に邪辟なく、構想に辭樣に完全なる發育を遂げ、文字に文法に疵瑕なきをいふなり。

文例句例は、批評眼を以て讀ましむべし。無意識に誦讀せしむるは効なし。

平素學習せる文話練習の得力を應用して、一回は構想の上に、一回は辭樣の上にと、特に着眼點を定めてその巧拙適否を心に批判しつつ玩索熟讀せしむべし。或は之に、練習的工夫を加へて課し、只讀ましむるのみにあらず、己が技巧の幾分を施さしむるを得ば、文例句例は之によりて生命を帶び、活躍して生徒の文想を動かすべきなり。ここに於て吾人は文例句例の名の下に之を示すの外、更に練習の名の下に、幾多の句例文例を示すの得策たることを信ずるなり。而して、之を示すべき時間と勞力とは、作文教科書に依りて大に輕減することを得べし。

如上の理由に基づきて、文例句例の示し方には、左の如き種種の方法あるべし。

一、意匠を施さず、只本文のままを示すこと。

この法に於ては、特に口頭の注意を與ふる等の必要も起るべし。

二、構想上より細分して、その要處要處に評語を挿入して示し、若しくは自ら挿入せしむること。

段節の配置の如何等は、固より之を明らかにすべし。

三、文例の構想を、表若しくは筋書に作りて併せ示し、若しくは自ら作りてその結構を明らかならしむること。

四、句讀點を施さしむることによりて、意義の斷續を了解せしむること。

五、その文に特種なる辭樣を見分けしむること。（例へば尊崇の情を表はす文に於て、敬語謙辭を檢出して、その配置と文體に及ぼす影響とを知得せしむるの類）

六、基本的辭樣の配置につき評語を附して示し、若しくは附せしむること。

七、修飾的辭樣の配置につき評語を附して示し、若しくは附せしむること。

八、叙事・叙言・評語の配置等につき評語を附して示し、若しくは附せしむること。

九、文の三要素に着眼して評語を附して示し、若しくは附せしむること。

十、辭樣局部の例を示すにも、成るべく前後の關係狀態を了得せしめんがた

めに、數行に亘れる長き形として掲ぐること。

この法に從へば、一例よく數箇の辭樣を兼ねて、羅數的効果を收むべく、且は小文例を多く示すこととともなるべし。

十一、教科書參考書の類によりて多くの文例を列擧して示すとき、その分類法に種種あるべし。

記傳・論説等、文の內容に基づきて彙類するあり、頗る舊式なり。記事・叙事・解説・議論等、文の種類の名稱の改まるがままに、之に基づける分類法あり。その舊式なることは前者と大差なきが如し。かかる分類法固より舊式の故を以て顧みるの要なしといふにあらざれども、更に切實なる分類法の意匠の、之に加味せらるべき者なかるべからず。構想・辭樣の難易繁簡の度に基づきて排列するも一法。莊重・雄健・優麗・簡潔等、文體の如何に基づくも一法。內容の廣狹に基づきて一文題下に數篇を繫け、或は觀察點着想の異に基づきて一文題下に數篇を繫け、以て對比誦讀の便に供するも一法。謹嚴なる文と詼諧戲作の類とを交錯して對照せしむるも一法。實想の文と假作とを並出せしむるも一法。書翰文の如きは、誘引・報知・祝賀等、從來行はれし分類法に從ふも不可なしと雖も、發信者・受信者間の身分關係等に基づきて分類排列するも、亦趣味あり裨益ある一法たり。凡そ此等の分類排列、各長短ありと雖も、要するに一に拘泥せず、つとめて併用主義を取り、その間におのづから作文教授の主義の見はれ出づべからんことを望む。かく、文例の排列をだに苟もせざるとき、無形の效果は必ず生徒作文の上に及ぶべし。

教材の運用について、細密に考究せば、論ずべき要項更に多かるべし。今只、その梗概を摘錄せるのみ。

第五章　文稿の處理

展覽・回覽・保存等の事は既に述べたり。今、添削に關して說く所あらんと欲す。

孔子曰く、「訴を聽くこと、われ猶人のごとし。必ずや訴なからしめん」と。移して作文添削の事に比ふべし。添削を施すこと、誰か人の添削を施すが如くならざらん。必ずや徒爲徒勞なからしめんのみ。本章を分ちて三節となす。曰く、添削の勞と時とを輕減する策、曰く、添削の方法、曰く、添削を有效ならしむる策、これなり。

第一節　添削の勞と時との輕減策

作文敎授上一般に關する勞と時との輕減策は既に述べたり。而して、策中主とするところの一は添削の勞と時とを輕減するにありき。蓋し、作文敎授一般の勞と時との輕減には固より添削の勞と時との輕減を包含すれども、添削の勞と時との輕減は、添削を除ける他の作文敎授上の勞と時との輕減に一致するものにあらず。又相抵觸するものにあらず。添削の勞と時との輕減は、添削を除ける他の作文敎授上の勞と時との輕減に負ふ所ありといはんよりも、寧ろ作文に關する總ての敎授法に依賴すといふを至當なりとす。即ち、適當なる敎材排列のもとに、有效なる文話あり、練習ありて、一方には作文力一般の發育を遂げしめ、一方には、完全なる自作の準備を得しめ、かくて、文題の選出に、自作時間内の管理に、乃至既に說述せし諸種の方法に顧慮する所ありて、敎師・生徒共に熱誠を傾注せば、その成れる草稿は、必ず能く整ひて、ここに添削の勞と時とを輕減すること實に大なるべし。

文稿について、添削の勞と時とを冗費せしむる分子を索めば、蓋し二つあらん。一に曰く、生徒の作文に於ける實力の極めて不足なるがために、常に所題の自作に應ずる伎能に乏しきより生ずる拙劣、二に曰く、生徒の怠慢若しくは不注意なるがために、實力の有らんかぎりを發揮せざるより生ずる疵瑕、これなり。この二つのものは力めて之を除かざるべからず。若しこの二分子を除かずんば、作文添削は永く徒爲徒勞の爲に敎師を苦惱の淵に沈淪せしめん。この二分子を除いて行ふ添削は、眞の效力ある添削なり。眞に生徒の作文力を進

歩せしむるの添削なり。この添削のために要する時と勞とは否むべからず。この添削のために要する時と勞とは、決して今日の如き、作文教授法の不備の時代の添削に要する時と勞との如く大ならざるなり。若しこの添削の時と勞とにして教師の任に堪へざるものありとせば、そは受持生徒數の多きに過ぐるなり。難きを人に責むるものなり。更に作文教師の員數を增加してその負擔を分たしめざるべからず。若しこの添削の時と勞とを適度に分擔して、而も猶その負擔の苦を訴ふるものあらば、そは、その教師の熱心を疑ふべき理由ともなるべし。故に吾人は、作文添削の徒爲徒勞を防がんがためにも、先づかの二分子を除去せんと力めざるべからず。

然るに、その第一分子たる生徒の實力の甚だしき不足といふことは、秩序ある工夫ある文話練習によりて略、除去するを得べし。何となれば、文話練習は、生徒の能不能に殆ど一任して省みる所少なかりし舊式の作文教授法の如くならずして、よく、作文として教へらるべき教材の適當なる運用の下に、能不能共に、ある度までは一齊に發達せしむることを得ればなり。かくて猶、作文力の甚だしき不足の者ありとせば、その劣等者の多數ならんには文題の程度を低うするの必要あるべく、その劣等者の少數ならんには、特に之を率ゐるの工夫あるべし。特に率ゐて猶及ばずんば、これ移らざるの下愚のみ。教師の罪にはあらざるなり。

第二分子の除去法は奬勵と制裁とにあるべし。多數の生徒中には、惡むべきばかり怠慢なるあり、不注意なるあり。平易簡明にして、智識としては既に知悉せることを、章句の上にも、文字の上にも、文法の上にも誤り重ねて平然たるものあり。幾度添削せらるれども改まらず、幾度注意せらるれども意に介せず、常に同樣の語謬拙作を敢てするが如きものあり。此等は、嚴しき制裁の下に之が矯正策を講ずるを至要なりとす。自作時間の管理の必要の如きも、半ばはこれがためなり。更に之を復誦せんか、作文添削の勞と時とを輕減するは、文話と練習とを有效ならしむるにあり、文題の選定を適切ならしむるにあ

り、管理を嚴にするにあり、讀み返して自ら添削せしむるにあり、書き方を整頓せしむるにあり、添削を有效ならしむるにあり、簡言すれば、作文敎授法の全部を完備するにあるなり。吾人は未だ、これ以上に作文添削の勞と時とを輕減すべき術を知らず。而もこれだに確實なる實施を見るを得ば、之によりてその勞と時とを輕減すること決して尠少ならざるべしと信ずるなり。

文稿書き方の整頓は、事些末に屬するが如くなるを以て、ややもすれば輕輕に看過せらるることあり。然れども、その添削に及ぼす影響は頗る大なり。書き方の不整頓なるがために、添削に臨みて、判讀に苦しみ無益の時間を空費するは、實際家の必ず知悉せる所なり。況や、書き方の不整頓その事が既に生徒の怠慢を表白し、若しくは思想の殽亂・作文の沒趣味を表白せるものなるをや。事情許さるべくんば、作文帳若しくは作文用紙を一定して、(文字の細書に失せず、行間に添削の餘白を存すべき縱橫罫の類を可とす)之に書かしむべく、字體字畫を分明ならしむべし。交ふる假名は、片假名・平假名兩樣に亘りて習熟せしむる必要あるべければ、敎師豫め、その何れを用ふべきかを出題の際に併せて明示し、之によりて必ず字體分明に書かしむべく、決して亂書せしむべからず。平假名は、殊に亂書に陷り易ければ一層注意する所あるべし。時間の經濟の名のもとに草書走り書きを希望するものありとも、概しては許容せざるを可とす。學生の草書は眞の草書にあらず、殆ど通讀すべからざる自己流の崩し書きなり。かくの如き書體を看過してその癖に馴れしめば、後來實務社會に出でても、己が杜撰より人の誤讀を招き、意外の害を生ずべし。初より謹敕に書くべきことを命じて、之に習熟せしめよ。之がために甚だしく時の不經濟を致すことは無きものなり。

普通文に、段落を切り、句讀點を施さしむることは勵行すべし。生徒の思想に條理立たしむるのみにあらず、延いて添削の勞と時とを輕減するに與りて力あること大なり。

第二節　添削の方法

黒板上にて添削するあり、文稿について添削するあり。板上の添削は、先づ添削すべき文を書くの勞と時間と面積とを要するが故に、長文については行はれ難き方法なり。初等教育には效多く、中等教育程度には、價値少なき方法なり。然れども、その普遍的にして、一齊に教師の知らしめんと欲する所を知らしめ得るの便あるが故に、中等教育にてもこの法を廢止すべきにあらず、寧ろ適當なる運用の下に之を利用すべし。例へば、生徒の作たると教師の作たるとを問はず、一般に陷り易かるべき缺點誤謬の類を含める一行乃至數行の語句を掲げ、之について板上添削を行ふが如きは、頗る有利なる方法たり。かかる添削は、寧ろ次節に述べんとする文疵指摘の一方法に數ふるを至當なりとす。要するに、この法は、生徒と問答批評しつつ添削することに由てその眞價を增す。教師の獨り舞臺を演せんは效少なし。

文稿添削に關しては、吾人多年之に矻矻として、而も未だ何等の斬新奇拔なる方法を案出する能はず。作文教授法が一箇の術なるが中に、文稿添削は最も困難なる術にして最も老練を要するものなるべし。文話練習以下百の作文教授法は、固より文稿添削に關接的無形の助力を與ふること既に述べしが如くなれども、之によりて添削そのものを直接に左右することは不可能の事に屬す。構想に、辭樣に、生徒の文稿について一讀してその不備を知得するは易し。この不備を如何に修正添削せば以て原文の意を達せしめて佳妙若しくは完備に近からしむべきかと案じて朱筆を下すが困難なるなり。此等の不備は一文中に幾箇所もあるべし。その箇所每に朱筆を攝き手を拱して、如何に添削すべきと案ずるやうにては、一文の添削にも少なからぬ時間と勞とを要すべし。少なくとも數十人の作文を受持てる作文教師が、些子だに躊躇せば時と勞との費は計るべからず。故に、作文教師は、通讀一過立ちどころに朱を加へ得るの伎能なかるべからず、若しくは、その文稿を片はしより閲讀しな

から淀みなく朱を加へ得るの伎能なかるべからず。この伎能は、如何なる作文教授の大家も多く教ふる所あること能はざるべし。只、作文教師自らが、文理について研鑽を重ね、構想に、辭樣に、變轉微妙の味を悟り、應變自在・臨機自由の道に熟達し、恰も擊劍・柔道の師が、變幻極りなかるべき技術上の應用に對して自在の腕を示し、習ふ者をして各、分に應じて得る所あらしむるが如くなるべし。

文稿添削の手數に種種あるべし。先づ一讀再讀、原意を領し、疵瑕を尋ね、次で構想に批評を加へ、次で辭樣に添削を加へ、次で圈點賛評の類を加へ、次で三讀四讀なほ添削の遺漏なきかを檢して已む。かくの如きは最も鄭重なる方法なれども、多數の添削を控へたる作文教師の到底行ふべきものにあらず。通讀一過、然る後に朱筆を下すことは、時と勞とに於て容さるべき方法に屬す。更に受持生徒の夥數にして教師の老練の加はるあれば、讀みつつ直に朱を加へゆくも、大なる不可なきに似たり。かくの如きは、一見甚だ危險なるが如く

粗漏なるが如くなれども、老練なる教師の腦裏には、立言數句を見て直にその全文の思想の流域を概知し、辭樣の前部の形勢に察して後部の配置如何にあるかを推測し得べき機敏なる能力を有するが故に、人の意想する如く危險にあらず、粗漏にも失せざるなり。同一生徒を受持つこと年を重ぬるときは、各箇生徒の性癖を知るが故に、その文稿添削には更に便益を加ふべし。

添削の朱はつとめて少なきに從ひ、成るべく原作の意を害せずして之が疏通を圖るべきこと勿論なれども、時としては大斧正を行ふも、亦決して不可なることにあらず。初學の文は、筆端の窘縮して暢びざるがあると同時に、又、散漫冗長終始の知られざるものも少なからず。後者の如きに遭ひては、斷じて大斧正を行ひて可なり。これ、截斷節略の工夫を教へ簡潔辭達の意を覺らしむるものにして、亦機に適へるの添削法なり。吾人往往實際に於て、大刪正を行ふべき文に遭遇すること少なからず。

普通に行はるる添削にては、文字・文法の誤、首尾・呼應の誤、語脈・辭樣の誤等、謂は

ゆる文の疵瑕なるものを捕へて是正し、その他は多く顧みられざるものの如し。これ、添削の勞の過大なるがためなるべしと雖も、多少の遺憾なきこと能はず。予はかくの如き添削法を消極的添削と名づけて、之に配するに積極的添削を以てせんことを欲するなり。積極的添削とは何ぞや。文に一段の技巧の道を開き與ふることなり。この意味に於て、略、文疵なき文稿についても、なほ、時と勞との容す限りは添削を施すべし。等しく同義を表はす辭樣ながら、生徒は乙の辭樣を用ひたるがために、文疵なくして又技巧の見るべきものも無きを、甲の辭樣に添削し與へて一分の技巧をだに示すは、確かに文の進境に裨益あるべし。文字・文法の誤の如きは、漸次、講讀・文法の科にその責を讓りたきものなり。生徒の粗略より來れる誤謬と看破せし所は、添削せず、別に符號を附して、生徒の自改反省を促すべし。

添削は、必ずしもその文毎に完璧たらしむることを期せずとも可なるべし。要は、生徒の學力の進むに從ひて大成に近づかしむるにあり。生徒が現時の學力に順應する所なくして、その文の完備を期するが爲の故に高尚なる添削を施さば、勞多くして功少なかるべし。課題の趣旨より打算して、或る時は辭樣に重きを置きて添削すべく、或る時は構想に重きを置きて批評すべきこともあらん。概して謂へば、純然たる自作課題の時は後者に從ふべく、文話練習その他の補助法より導きたる時は前者に從ふべし。

好結構・好辭樣の所には、圈點若しくは贊評の語を加ふるを可とす。有力なる奬勵法となるものなり。眞の好結構・好辭樣にあらずとも、その生徒の平素の學力に省みて比較的良好なる構想・辭樣あらば、吝むことなく圈點評語を與ふべし。之がために、既往の厭倦の念を拂ひて、將來に趣味を抱かしむること少なからず。之に反し、構想・辭樣の不良なる所に批評の語を加ふるも亦、効力あり。然れども、人情大抵非難の言を惡みて稱贊の語を喜ぶものなれば、苛責して匡救せんよりも贊して奬順するを勝れりとなす。一揚一抑、その配合の宜しきを得ば、評語ここに効力を增加すべし。又、各局部に當り欄外に評するの

みならずして、篇末、全文の評語を施すときは、いよいよ効あり。評語は文話と提携するを妙とす。例へば、文話に首尾の呼應を敎へて後、『呼應良し』等の語を用ひ、層語法を示して後、『層語妙』等の語を用ひ、文の三要素を說きて後、『文理明晰』『文辭雄健』『流麗玉を轉ずるが如し』等の語を用ひて評せば、文話自作兩つながら生氣を添へ來る。『句調ばず』『思想の正確を缺く』『意餘りありて辭足らず』『文疵あれども構想は可』など、痛切なる評語、固より運用を待つて効力を生ず。

生徒をして相互に文稿を批評せしめ、添削せしむることも、興味あり裨益ある一法たり。之にも種種の手段あるべし。然れども、この法は、その評正鵠を得ず、添削誤謬を免れず、ともすれば添削して拙劣を增すことあり、評して謹敕を缺くことなきを保せず。故に、しばしばすべからず。若し施行するときは嚴しき監督を要すべし。敎師添削の代用に充つべからざることは論なし。要するに、添削の方法に關しては、尙更に研究と實驗とを重ねざるべからず。

第三節　添削を有效ならしむる策

敎師の辛苦に成れる添削文稿を返附するに及んで、衷心悅んでその勞を謝し、熱心に閱讀してその添削せられし所以を推究し玩味し咀嚼して添削の勞に酬いんとするもの、天下の學生中それ幾人かある。多くは、粗讀一過し、朱書を一瞥して已む。これ猶可なり。甚だしきに至りては、その氏名の上に附せられたる成績評語を一見して忽ち懷にし、或はその成績不良なれば、揉みて敗紙となし、裂きて唾棄するもの無きにあらず。かくの如くにして添削の效擧るべけんや。敎師に對する不敬の罪固より輕からずして、作文授業に於ける彼我の不經濟なる損失も亦、甚だしといふべし。故に吾人は、監督を嚴にし、手段をめぐらして、添削を有効ならしむるの方法を講ぜざるべからず。

作文若しくは講讀(作文と講讀と同一敎師の受持なるとき)の時間の一部分を割いて添削文稿を與へ、その一定の時間內に必ず幾回も點讀せしめ、原作と對

照商量して、添削せられし所以を推究せしめ、疑義あらば質問せしめ、或は教師より反問を試み、誤字誤法の簡なるものは欄外に再書せしめて記憶を確かならしむるが如きも一法。嚴肅なる監督の下に互に交換閲讀せしむるも一法。交換閲讀は極めて有利なる方法なり。劣等生が優等生の文を見て得る利益の大なるは勿論、優等生が劣等生の文を見て得る所亦必ず少なからじ。何となれば、既に教師の添削を經たるものなるが故に、その拙劣不備の點についても、げに斯く添削すれば可なり、斯く増損すれば可なりと一一首肯する所ありて、恰も多くの練習題に接するが如き感あらしむればなり。生徒相互の添削には弊害の伴ふものありと雖も、添削文稿の相互交換閲讀は、殆ど弊害を認めず、只利あるを見る。若し生徒の熱心を促して、眞誠に作文力を得んと欲する心意狀態の下にこの法を行はば、自作の文は一通なるも、多作して多くの添削を得たるに近き効果を收めしむべし。只この法に於て、生徒の性癖ややもすれば他見を忌憚するものなきにあらず。この癖は疾くに打破せざるべからず。從って相互に屈辱謗難の材料たらしめざらんことを警戒せざるべからず。教師の威嚴と懇切とより出づる説諭は、必ずこの弊を防遏し得べきを信ずるなり。かの、一二組長の輩を召して、何の注意も與ふることなくして、多數の時間の苦心に成れる添削文稿を返附するが如きは、極めて無謀なる、極めて危險なる方法に屬せり。或は多數生徒に通有の誤謬缺點を初に指摘し、さて後に前二方の一を行ふも可なり。或は優等文を朗讀し若しくは、朗讀せしめて、一般生徒に聽かしむるも可なり。

文疵指摘は添削の後に來るべき大なる課程なり。黑板上若しくは口頭の批評によりて行はるべし。文疵指摘は消極的なり、添削の消極的なるものと呼應す。更に積極的方法として佳文賛評(新熟語のやうなれども、今恰當せる語に想到せざるが故に姑く斯く名づく)を併せ行はんことを望む。ここに佳文といふは、必ずしも通篇の佳良なるをいふにあらず。一文の中、一段若しくは數句數行の佳なるをも、採りて旌表すべく、辭樣の巧あらざるも構想の完きあ

り、構想にやや不備なるも辭樣に一種の美あるをも、採りて旌表すべきをいふなり。抑あり、揚あり、文稿の指摘教授始めて全かるべし。

主として指摘の材料に供せんがために、併せて各箇生徒の作文に於ける特長習癖を知らんがために、若しくはこれより綜合して多數生徒の通有せる長短を推測せんがために、『添削控』とも名づくべき一簿冊を作り、常に添削の座右に置いて、各生作文に散見せる長短得失の一端を、得るがまにまに記入し行かば、之によりて作文教授上の諸般の注意を網羅し得べく、之によりて我にも生徒にも裨益を及ぼすこと實に大なり。勞と時と、容易に許す所にあらずと雖も、教師の負擔幸にして重からざることあらば、力めて之を試行せられんことを希望す。

添削を有効ならしめんがためには、なほ、添作文稿を各自に纏めて保存せしめ、時に之が點檢を行ふも可なるべく、その保存舊稿を時時に自ら讀ましむるも可なるべく、或は、添削せられしものを更に淸書せしめて點檢するも可なるべくはた之を保存して時時に自ら讀ましむるも可なるべし。劣等生のためには、特に添削文稿についても、箇人的説明を與ふるの要もあるべし。仔細に推究せば、更に種種の有利なる方法も出づべし。

漫に禿筆を驅りて、つひに本論を結ぶ。思へば斯道も亦難いかな。

第五篇　餘論

作文教授の諸問題は、前數篇に於て略、卑見を具し畢りぬ。今之に附隨すべき二三の問題を揭げて識者の明斷を仰がんと欲す。

一　作文より國漢文の講讀及び文法の教授に對する要求

作文の一分科として獨立すべきことは總論の述ぶる所なり。然れども、諸種の學科が有機的組織を爲して互に相提携すべきは論を待たず。まして、その本を同じうして、只教授上の便宜のために獨立分科となるべき國漢文の講讀及び文法とは、極めて親密なる關係を有たしめて、互にその本分を盡すと同時に、互に補助の功を完うし、以て國語及び漢文と稱する廣濶なる一科の目的を遺憾なく達するの企圖なかるべからず。吾人が講讀文法の教授上に要求する

る所あるも、亦實に止むべからざることなるべし。

國漢文講讀及び文法に於て、作文に補助すべき細目は、順序論に挿入せる第三表第四表によりて明らかなり、今敢て贅せず。只之を實行に促せば足れり。

思ふに、講讀文法に於て授けられたることが、往往了解の精確を缺き、記憶の確實を失ひ、爲に作文に累を及ぼすこと尠少にあらず。漢字書取の練習の屆かざるがために、平易なる文字をも誤ること實に多く、語句の實質に精確なる意義用法の觀念なきがために、語句運用の妥當ならざるもの實に多く、文法の法則に明瞭なる智識記憶なきがために、音便の誤・假名遣の誤・送假名の誤・活用連語の誤等實に多し。凡そ講讀文法の本領としてその責に任ずべき事項にして、その智識記憶の不確實なるがために作文教授殊に文稿添削を惱ますもの、勝げて數ふべからざるに至らんとす。吾人は漢字の誤書以下諸種の誤を、一も作文教授に於て救濟するの義務なしと主張するものにあらず。固より連帶責任を以て事に當るの覺悟を有せり。然れども、物おのおの本務とする所

あり。本務に當りて殊にその責を盡すは必要なり。今の作文添削は殆ど文字文法の誤を正して止むが如き觀あり。何を以てか文理の巧拙に論及することを得ん。恰も、講讀文法の本領を補助するを以て作文の主なる任務となせるものの如し。作文教授が斯くて甘んずるならば、これ、作文教授がみづからその本領を沒却するものなり。講讀文法の教授が斯くて猶得たりとなさば、これ、その教授がその責を盡さざるものといふべし。之を實際に徵するに講讀文法の教授法の如何に研究せられ如何に實施せらるるかを疑はざるを得ざること往往にして在り。他の諸學科の筆記答解等に見て、わが作文科の成績に見て講讀文法の教授法に更に一段の注意を要すべく想到すると共に、わが作文科の講讀に於て、讀本中の一篇の文を教授するに、如何にその文の構想について示す所あるべきか。如何にその基本的辭樣修飾的辭樣について示す所あるべきか。如何にその措辭の配置について示す所あるべきか。その字句について如何に精確なる觀念を與ふべきか。同音異義の語を併せ示すべき必要は無きか、異音同義の語を併せ示すべき必要は無きか。一語、用途に由て兩三樣の義に別るるものあるとき之を併せ示すべき必要は無きか。殆ど同義の語ながらその用途を別にするものあるとき之を併せ示すべき必要はなきか。曲折難解の辭樣あるとき之を巧妙に口語に移す方法は如何、或は之を平易明晰なる文語に改作するの工夫は如何。古語に遭へるとき之を今語に改めしむる手段は如何。辭樣の巧妙なるものに遭ひて之を摸倣せしむること如何。日常必須の文字語句はこの文中に幾何ありて之を牢記せしむること如何。特に漢文に於て、語脈句法の、國文に密邇せざるものあるとき之を妥當なる國文脈に改めしむること如何。訓點即ち送假名を文法の法則に基づかしむること如何。凡そ講讀の教授に於て、注意すべく研究すべき問題も亦實に多かるべし。素讀一過、講義一遍、或は難解の局部を說示するに止め、咀嚼の味なく、興味の感得なからしめ、只水の流るるが如く、逝いて復らぬ授業にて終るが如

きことあらば、何を以てか、その本領と補助との任を全うすることを得んや。文法の如きも、道理法則の一遍の紹介に止めず、練習を多數にして、一法一則必ず確實なる智識となして應用に資せしめ、更に之を講讀の際に提供して之が補助的練習を要求し、以て精確なる文法智識を獲得せしめんことを計らざるべからず。吾人の希望より謂へば、習字も亦、書家風の教授を廢して力めて實用に副はんことを旨とすべきものなり。而して、習字の實用的方面は、作文と殆ど表裏形影の如き關係ありといふべし。

二　作文と講讀文法との受持配合の利害得失

受持配合の事は、教師の員數その他種種の事情の下に、理想はありとも、實施に難しとする所往往なるべし。前項の趣旨より論ずれば、一人一分科について多數の生徒を受持たんよりも、寧ろ比較的小數の生徒について各分科を併せ受持たん方稍、理想に近かるべし。蓋し、各分科相互の間に密接なる提携を圖ることを得ればなり。今や國語教師ありて、國語の講讀若しくは講讀・文法を受持ち、漢文教師ありて、專ら漢文の講讀のみを受持つ。甚だしきに至りては文法教師ありて專ら文法のみを受持ち、作文教師あり專ら作文のみを受持つ。かくして、各、高等專門學校の如き形勢を備ふ。かくの如きは豈普通教育(高等の二字を冠せしむべき普通教育なりとはいへ)に執るべき良法ならんや。國語文法と漢文との受持教師の異なるがために、甲の教師の熱心に授けし文法を、乙の教師は無意無識に蹂躙破壞することなきを保せず。作文が漢文教師に隷し、或は國文教師に隷する等、その所屬の如何によりて、文體以下彼此相扞格することありて、その扞格に許すべきあり許すべからざるあり。作文專門の教師といふが如きに至りては、勞のみ多くして功之を償ふに足らざるべし。國語(主として講讀を意味す)といひ、漢文といひ、文法といひ、作文といふ。教授の便宜上、學科としては之を分つを至當と信ずれども、之を教ふる教師は成る

べく一體にして四者を備具せんことを欲するなり。例へば、ここに十二學級ありて四人の國漢文教師ありと假定せんか、各教師の、學科に於ける勞力は一長一短を免るべからざるべしと雖も、甚だしき懸隔の存せざる以上は、如何なる受持の配當法よりも、各教師各、四分科に亘りて三學級づつ受持つの、最も單純なる配當が、最も理想に近かるべし。この見解にして誤らざらんか、國漢文の教員を養成せんにも、つとめて四分科均等の學力教授術を備具せしめんことを要すべく、之が任用にも亦おのづからその心ばへあるべし。學級の數、教師の定員により應變の策あるべきは固より論を待たず。

三　受持期限のこと

受持の異動は、學年の始に於て避くべからざる問題なり。國漢文科の如き比較的多數の教師を一團とせる學科に於ては、殊にその變動を免れず。然れども生徒の習性を熟知するの便と、その學力程度を熟知して之に適應すべき教授を施し得るの便とのために、事情の許す限りは前學年に繼續せしめて同學級を持ち上らしむべし。世には、動もすれば、俸給の薄く席次の低き教師には常に下級を受持たしめ、厚俸高次の者常に上級を受持ち、その間に秩然たる階級あらしめんがために、年年歳歳受持學年は變らずして、受持生徒は變りゆき、之がために、漸く師弟の情の溫度を高め我の力に巢だちせしめん彼の力に巢立ちせんと思ひ思はるる貴き心緒を無慙にも截斷して、之を人手に渡さしむ。かくて同一無趣味の教授事項を同一程度の異學生に授く。何によりてか教師の熱誠を促さん。何によりてか教師の研究心を興さん。教育の神聖遂に保ち得べからず。それ、教育は精神的事業なり。教師生徒熱誠の有らん限りを傾注せざるべからず。教ふるや祿その中にあれども、祿を思ひ地位を冀ひて教壇に立つは、未だ眞誠の教育家にあらず。前に述べしが如きは、適、以て教育家をして眞誠の教育家たらしめざる不良動機の一に屬すべし。故に事情の許す限りは持ち上りの主義を實行せられんことを望む。

四　打合せ研究會及び相互授業參觀のこと

教授事項、教授の方法等につき、毎週若しくは隔週に、定日を設けて、互に意見を打合すべき研究會の行はれんことを望む。教授は固より自由なるべく、妄りに拘束を許さずと雖も、その間おのづから氣脈を通じて、大體に於ては主義の一貫せるものなかるべからず。同一學校内に於て、甲乙異校の授業を觀るが如くにて統一なからんは、決して喜ばしき現象にあらず。況んや作文科の如き、同一學年をすら二三の教師に分擔せしむべき事情の起り易きものにありては、殊に歩調を揃ふるの必要あるをや。更に進んでは、時と勞との許すかぎり、相互に授業を參觀してその長を取り短を補ふべし。然れども、互に猜疑あるべからず。障壁を撤して、和氣藹藹の裡に渾然たる一家庭を作り、以て美を外に完うすべきなり。

五　作文教授者優遇の道を開くべし

徒爲徒勞を巧に省除し得たりとすとも、作文教授は最も多く課外の勞と時とを要するものたること論無し。自作文稿添削に於て、如何に機敏に雌黄を施すとも、蓋し一通平均十分時を要せん。その思想の短きものにありては五分時にして了るべきものあれども、長きに至りては二十餘分時を要するもの亦無きにあらず。されば、平均十分時よりも短縮せんとせば、添削は只名のみにして終らん。而して、受持生徒數を假に百人とせば、一回の添削時數實に十有六時四十分を要すべし。之に練習課題の添削の加はるあり。その勞と時と、思ひ見るべし。是故に、之を當路者の側より言へば、作文教師は特に優遇の道を開かるべきものなり。然るに、事實は往往之に反し、雷に優遇せられざるのみならず、動もすれば、その時と勞との如何に消費せらるるかをも、監督者には邈として認識せられざることあり。かくの如くにして作文教授の實績豈擧

るべけんや。

六　作文教科書と國語文法の教科書

作文教授の爲に獨立の教科書の必要あることは既に論ぜし所なり。事若し行ふべからずんば更に一の彌縫策あり。即ち作文教科書に編入すべき教材の一半を國語讀本に加へ、他の一半を文法に加ふることこれなり。この場合に於て、國語讀本に編入すべきものは主として文話文例の類なるべく、文法書に編入すべきものは、主として辭樣上の練習なるべし。或は國語讀本の各課末に、文法事項と配して辭樣練習の課題を附屬せしむるも可なるべし。然れども、なほ作文獨立の教科書あるには如かざるなり。何となれば、作文の文話は練習と相待ちて効を奏すべく、而して、作文教授の要求に適すべき文話と練習とを相配して國語讀本若しくは文法書に收むることは、錯雜、淆亂の虞あるべければなり。作文の練習は種種多樣を極むべく、而して之を文法書に收めんは、比較的秩序あるべき文法の教理を攪亂して兩ながら得る所少なかるべければなり。或は謂はん、現時の讀本既に文例の多種を含め、之を外にしてまた何ぞ文例を示すことを要せんと。それ然り、然れども國語讀本の輯めたる今文は、なほ讀本の性質として、綴り方の模範たらんよりも講讀の材料たらしめんことに重きを置けり。故にその文の內容に、外形に、遠く間接に模範たるべくはあり。されど直接に、學生の今の思想を表出すべき模範たるべく密邇せざるを如何せん。まして文例は、文話練習と相呼應してその用を全うすべきをや。作文教授法が在來のままにして已むべくんば論なし。苟も然らざる以上は、ここに適當なる教科書の供給なかるべからず。故に予は今第二策を獻ずると共に、復び作文教科書の必要を絕叫するなり。

七　論理の一斑を作文科に於て教ふるの可否

論理は作文の獨占すべきにあらず。然れども、正確なる思想を表出せしむべき文章にありては、論理の理法に基づくべきもの少なからず。故に、作文に關係あらしめて之が一斑を說示することあらば、裨益する所蓋し大なるべし。故に予は、修辭について辭樣の技巧を敎ふると共に、論理について思想の精緻を促さんことを欲す。

論理が作文に必要なるは、論の法式にあらずして、之を根據として得たる表出の健全といふことにあり。故に之を說明するには、一一文例を取りて之を論理の法式に照して、その健全なりや否やを驗して示すべけれども、之が練習を爲さしめんには、寧ろ前者に反對の方法を取りて、即ち一定の論式の下に思想を示し、之を成るべく巧妙なる辭樣に改鑄せしむるが如き方法を運らすべし。かくせば、興味ある短文練習を行ふと同時に、論理の一斑を窺はしむることを得べきなり。

普通敎育における

作文敎授の理論と實際 終

明治四十二年九月五日印刷
明治四十二年九月十日發行

作文敎授の理論と實際
定價金壹圓五拾錢

著作者　友田冝剛
發行兼印刷者　岩田僊太郎　東京市下谷區櫻木町貳番地
印刷所　日清印刷株式會社　東京市牛込區榎町七番地
發行所　晩成處　東京市下谷區櫻木町貳番地
發賣所　目黑書店　東京市京橋區南傳馬町貳丁目　振替貯金口座第二八〇九番

著作權所有

2V-99

友田宜剛先生新著

◎中等作文教本　全五冊　定價金壹圓六拾錢

◎教科書に應用せる作文教授の新潮　全五卷　非賣品（參考用）

◎女子作文教本　全四冊　定價金壹圓五錢

◎教科書に應用せる女子作文教授術　全四卷　非賣品（參考用）

◎實業作文教本　全貳冊　定價金貳拾壹錢

◎小學綴方教本　全貳冊　近拾刊

◎小學綴方教授書　全六冊　近刊

東京市南傳馬橋町　目黑書店

東京市櫻木下谷町　晩成處

263.2
40
Ⓜ

048353-000-2

263.2-40

普通教育における作文教授の理論と実際

友田 宜剛／著

M42
BEF-2413